

ストレスに対する文化的変容の効果

長島 萌

社会において、あらゆる人々に生じるストレスは社会問題化されている。本研究では、ストレスに影響を及ぼす社会生態学的要因として関係流動性を挙げた。関係流動性とは、ある社会または社会状況における対人関係に関する選択肢の多さ、新たな対人関係の形成、既存の関係の維持・解消における自由度の高さを意味する社会生態学的要因 (Yuki et al. 2007) である。本研究では、大学入学後に転居し、関係流動性が低いところから高いところへ移動した人々はストレスを感じるのかを明らかにすることを目的とした。大学入学後に転居した大学生を対象に転居前と転居後の関係流動性、人口、友人数、知人数の変化がストレスと対人ストレスイベントに影響を及ぼすかを明らかにするため分析を行った。結果として、関係流動性変化はストレスに対してマイナスで有意傾向 10%、人口変化が対人ストレスイベントに対してマイナスで 5% 有意であり、その他の項目はいずれも有意ではなかった。すなわち、大学入学後に転居し、関係流動性が低いところから高いところへ転居した人々はストレスを感じることはないということが示された。関係流動性の変化はストレスに影響を及ぼす要因ではないことが明らかになったため、今後の課題として、ストレスに影響を及ぼす関係流動性の変化以外の社会的要因を明らかにする研究を行う必要があると考える。